

今こそ渡れ武士（もののふ）の 名を高松の苔に残して
作品解説

近江典彦

タイトルは戦国時代の武将・清水宗治の辞世の句「浮世をば 今こそ渡れ武士の 名を高松の苔に残して」による。

備中高松城主となった清水宗治は秀吉の中国攻めの際、世に名高い備中高松城水攻めにあいますが、城兵の命と引き換えに、また恩義のある毛利家に報いるべく自刃（切腹）します。

籠城中で身だしなみを忘れた者と思われないよう切腹前に髭を抜き身嗜みを整え、水上に舟を漕ぎ出し、ひとさし舞ったのち潔く腹を切り、介錯人に首を刎ねられた宗治の作法は見事であるとして武士達の賞賛を受けています。秀吉は信長の敵討ちのために一刻も早く京へ戻りたいところでしたが、「名将・清水宗治の最期を見届けるまでは」と陣から一歩も動かなかったそうで、後に秀吉は「宗治は武士の鑑であった」と絶賛していたそうです。

そんな宗治の辞世の句を題とした武士の生き方、武士としての在り方を描いた作品です。

作品は大きく分けて二部形式となっており、高揚感を伴う全体の流れと勢いを付けるため細かく切られた主題によって武士の勇敢さと逞しさを表すとともに、和音面では自然短音階のd-mollを基に前奏・間奏・後奏の部分ではh-mollが用いられ、その両調を繋ぐ役割としてのAadd4th(実質的な解決しないAsus4)と、従来の属和音に替わる役割としてのd-mollのVIIの和音 (Cmajor) が、其々切腹の覚悟を決めた武士の前向きな気持ちと、とはいえ物悲しい武士の定めと決意を旧来和声の長調のV→VI（偽終止）の擬似的な効果とマイナーadd2和音の効果により表しています。

本作品は、作曲者の恩師である藤原豊氏に献呈された。